

企業・団体の「出前授業」が集合

東京・科学技術館で開催 OOBのシニアも活躍

企業や団体などの出前授業を集めた「毎日メディアカフェ&毎日小学生新聞 学びのフェス2019春」がこの春、千代田区北の丸公園の科学技術館で開かれ、親子連れなど約1800人が来場した。国連で採択された持続可能な開発目標「SDGs」の17のゴールの一つに「質の高い教育をみんなに」という目標が掲げられ、同フェスはそれに「楽しみながら学ぶ」という要素を加えたイベントだ。

大海原が映ったスクリーンに見入りながら、ハンドルを回している。日本郵船による操船体験。「船もハンドルを回すと右や左に曲がることを知った。大きな船に乗ってみたい」。現役の航海士の説明を受けながらハンドルを握った男児が目を見守らせた。



日本郵船の操船体験を楽しむ子どもたち
＝東京都千代田区の科学技術館で4月3日

「日本は食料や資材など生活や産業に必要な原料のほとんどを外国から輸入し、貿易量の99%は船舶が運んでいる。そうした現状や船舶海運について知ってもらおうのが目的」と日本郵船海上人事グループの担当者。船の仕事に興味を持った子どもたちの中から、将来、船乗りが生まれるかもしれない。カシオ計算機の授業のタイトルは「電卓のひみつ」。同社の「小型

・軽量・薄型・省電力」という技術を駆使した電卓を分解して組み立てて、どんな仕組みで動いているのかを知る内容だ。国土緑化推進機構の授業では、大学の美術教師らでつくる一般社団法人「TOB USA」(トプサ)による木工教室が行われ、国産の木を素材にバタナイフや小皿を制作。「紙やすりでこすると木がすべすべになって肌触りが気持ちいい」などの声が上がった。



カシオ計算機による電卓の分解、組み立ては人気の授業だ



「ディレクトフォース」が協力した三菱マテリアルの授業。講師は企業の元役員らが務めた

「が保たれる」と言い、「学びのフェスを春と夏の風物詩に」と提案する。

今回のフェスで、新たな動きがあった。シニアの活躍だ。

三菱マテリアルは化学をテーマにワークショップを実施したが、講師を務めたのは一般社団法人「ディレクトフォース」(DF) 理科実験グループのメンバーだ。子どもたちは、同社や三井化学、ブリヂストンなどの元役員らの手ほどきを受け、界面活性の原理を応用した「墨流し」の技法でオリジナル絵はがきをつくった。

DFは、経営の中枢を担った人々が、社会の役に立ち、生きがいを感じることを目的に02年に設立された。理科離れを防ぐために小中学校で行う理科実験や、働く意味や国際社会とのかわりの大切さを高校生に伝える授業支援、里山再生といった環境保全など、それぞれの知識や技術を生かした活動を進めている。DFアカデミー本部長の小林慎一郎さん(71) 三菱マテリアルOBは、「幅広い企業が、将来を担う子どもたちの『学び』のために集まり、相互に交流する。そこに意義を感じた」と話していた。

ドリンクや航空貨物、グランドスタッフなど、空港の裏方を支える業務を紹介。連合は「小学6年生の子どものタレントが夜9時から生放送に出演してもいい?」「1日に働く長さは」などのQ&Aを通して「働くルール」を解説し、「おうちの人が仕事で困っていないかどうか聞いてみてね」と呼びかけた。

「にぎやかだったのは、キッズフリーマーケット。出店するのも買うのも小学生で、保護者らは柵の外で見学する。「ものを大切にするだけでなくお金も大切に」という意図で、「ほけんの窓口グルー

プ」と毎日新聞の「MOTTAI NAI」(もったいない) キャンペーンが共催した。同キャンペーンは、ケニアのノーベル平和賞受賞者、故ワンガリ・マタイさんが2005年に来日したときに日本語の「もったいない」に共感し「MOTTAI NAI」を世界共通語として広めることを提唱してスタートした。関連グッズの売り上げの一部をマタイさんが創設したケニアの植林プロジェクトに寄付している。

毎年、春と夏に開催される学びのフェス(毎日新聞社など主催)は、14年夏に始まり、10回目となった